関西自然保護機構会報（17）1－2，1989

巻頭言

自然となじみになるために
—自然保護教育の方法について思うこと—

森　下　正　明
（KONC 副会長・京大名誉教授）

「自然は好きかきらいか」と問われて「きらいだ」と答える人はまず見当らないだろう。しかし好きなはずの自然が開発などによって破壊されてゆくのを眼の前にして，たとえ惜しいという気持は働くにしてもそれから一歩すすんで，破壊と引き換えに与えられる目先の経済性や便利さに心を奪われることなく，その自然を守り抜くために眞剣な努力をしようとする人は，まだ少数にとどまっているであろう。その上同じく「自然」といっても，明るい雑木林や，柳の土手の間を流れる小川の風景が文句なしに人に好かれるのに対して，暗い照葉樹林などは人々にかえって陰うつな印象さえ与え，この林を大切にしようという気持をもつことができるのは，一般には好きだからというよりはむしろ書物や人から学んだ生熊系の機能や残存稀少群落の価値などという理論的な知識に負うところが多いのではなかろうか。もちろん単なる好ききらいよりは，学問的根拠にもとずく主張の方がより説得力があることはたしかであるが，そのような学問的知識も頭で理解するだけでなく，実際に林の中に分け入りその中の動植物と直接ふれ合いながら身につけることができれば，その理解は具体性を持つとともに，そこから親しみや愛着さえ生れて，保全のための行動の力強い原動力になるにちがいないのである。

しかし自然とのふれ合いといっても，少なくとも都市生活者の多くにとっては，野山に足を向け植物や動物の生活を観察して楽しむ機会や，あるいはその機会をつくるための積極的意欲さえ，必ずしも充分とはいいかねるのが現状ではなかろうか。各地で行われる種々の野外観察会などは，その機会を提供するものとして極めて有効であろうが，もしそのほか日常生活の中からでも自然とのふれ合いのきっかけを人々につかんでもらうことができればそれに越したことはない。その一つとして役立つのではないかと私が思うのは，手近な動植物の名を少しづつでも覚えてもらうことである。こういえば「そんなことは今さらいわれなくても判りきっている」と叱られるかもしれないが，判っているつもりでもこの地道な行き方は，最近の生態学ブーム（それ自体は喜ばしいことではあるが）の陰にかくされて，案外軽視される傾きがあるのではなかろうか。ある野外観察会において、指導員が「個々の植物の名前などはどうでもよい。大切なのは自然の仕組を知ることだ」と参加者を指導している記事を読んだことがあるが，私にいわすれば，初心者にとっては面々の植物なり昆虫なりの名を知ることは，それらとなじみになる第一歩である。そしてそのなじみ関係がひろがるにつれて自然全体に対する興味や関心も深められ，これを基礎にして学ぶことによって複雑な自然の仕組も実感を以て理解されるにいたるのではなかろうか。従来「名もない雑草」としてかえり見をしなかった庭先や路傍の植物が，一度名を覚えた後ではそれまでとはまるでちがった親しい友として眼にうつるようになった経験をもつものは，おそらく私一人ではないであろう。こうして名を覚えた植物や昆虫が増えるにつれ，今度は初対面の，あるいは

図鑑の中だけでしか知られなかった種類に野外で出会った時の喜びはまたひとしおである。このようにして自然の中に新らしい友を見出す喜びは，人の足をおのずと野山に運ばせることになり，たとえ外見は見苦しい原生林でもその内容の豊富さを知ることによって，かえって限りない魅力を感じるにいたるといえば，話が少し大げさすぎると笑われるかもしれないが，私にとってはそれは誇張のない若い時代の体験である。

しかし動植物の名を覚えるということも，その実行にはかなりの障害があることはたしかである。手軽に名を教えてくれる人がまわりにいなかったり，あるいは自分で調べようと思っても手許に適当な図鑑がなかったりして，名を知るのも容易ではないという人が多いかもしれない。そういう人たちはやはり野外観察会などを積樹的に利用して教えてもらうのが，かえって手っとり早い方法になるかもしれない。だがもし少年少女たちが名前覚えをはじめるとすれば，その実行はもっと容易であろう。学校の先生から直接教えをうけることもできるし，あるいは学校備えつけの図鑑を使っての調べ方の手ほどきをしてもらうことも可能である。それに大人とちがってこの時代に一度覚えた名は割合忘れないでいられるという利点もある。ただし生徒たちにその気をおこさせるには，先生の方からの積極的な働きかけが必要と思われるが，これこそ各学校ですでに行われていて，今さらここでいうのもおかしいくらいのことかもしれない。ぜひそうであってほしいものである。なお学校だけでなく各家庭の理解と協力がのぞましいのはいうまでもない。もし親子一緒になっての勉強ができるようなら，案外親にとっても生物の名を覚える近道になるかもしれない。もっともそれほど欲ばらなくても，少なくとも子供が虫いじりをしているのを見て「まぁきたない。早くすてなさい」などと叱るのをやめ，子供の自然への関心の芽を素直にのばせるよう親が心がけるだけでも，その子の将来には好影響を与えるものと思われる。もちろんこれらの少年少女に自然保護のための力の発揮を期待できるのは10年20年先のことであろうが，しかし緊急問題への対処は別として，息永く続けなければならない自然をまもる運動にとっては，これでも決して迂遠にすぎることはないと私は信じるのである。

公開シンポジウム 「シカと人と植物」

日　時：昭和63年６月26日（日）　　午前10時～午後４時
場　所：大阪市立自然史博物館　集会室
主　催：関西自然保護機構

プ　ロ　グ　ラ　ム

１．主旨説明と問題提起	奈良女子大学理学部	菅　沼　孝　之　氏
２．植物から―春日山を例に―	大阪市立大学理学部	下　田　勝　久　氏
３．植物から―金華山島を例に―	東北大学理学部	高　槻　成　紀　氏
コメント	三重大学生物資源学部	武　田　明　正　氏
４．シカから―奈良公園を例に―	大阪市立大学理学部	川　道　武　男　氏
５．シカから―大台ヶ原を例に―	兵庫医科大学生物学教室	三　浦　慎　悟　氏
６．林業サイドからみたシカ	森林総合研究所・関西支所	小　泉　　透　氏
コメント	大阪自然環境保全協会	木　下　陸　男　氏
７．総合討論		